

# しょうがい りゆう さべつ かいしやう すいしん かん ひろしまけんきやういくかんけいしよくいんたいおゆうりやう 障害を理由とする差別の解消の推進に関する広島県教育関係職員対応要領

## もくてき (目的)

第1条 この要領は、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（平成25年法律第65号。以下「法」という。）第10条第1項の規定に基づき、また、障害を理由とする差別の解消の推進に関する基本方針（令和5年3月14日閣議決定）に即して、法第7条に規定する事項に関し、教育関係職員（広島県教育委員会組織規則に定める事務局、県立学校及び学校以外の教育機関に勤務する職員。以下「職員」という。）が適切に対応するために必要な事項を定めるものとする。

## ていぎ (定義)

第2条 この要領において「教育委員会」とは、広島県教育委員会組織規則に定める事務局、県立学校及び学校以外の教育機関をいう。

2 この要領において「障害者」とは、身体障害、知的障害、精神障害（発達障害及び高次脳機能障害を含む。）その他の心身の機能の障害（難病等により起因する障害を含む。）（以下「障害」という。）がある者であって、障害及び社会的障壁（障害がある者にとって日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、概念その他一切のもの。以下同じ。）により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう。

## ふとう さべつてきとりあつかい きんし (不当な差別的取扱いの禁止)

第3条 職員は、法第7条第1項の規定のとおり、その事務又は事業を行うに当たり、障害を理由として、障害者でない者と不当な差別的取扱いをすることにより、障害者の権利利益を侵害してはならない。これに当たり、職員は、別紙に定める留意事項に留意するものとする。

なお、別紙中、「望ましい」と記載している内容は、それを実施しない場合であっても、直ちに法に反すると判断されるものではないが、障害者基本法（昭和45年法律第84号）の基本的な理念及び法の目的を踏まえ、できるだけ取り組むことが望まれることを意味する（次条において同じ。）。

## ごうりてきはりよ ていきやう (合理的配慮の提供)

第4条 職員は、法第7条第2項の規定のとおり、その事務又は事業を行うに当たり、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、その実施に伴う負担が過重でないときは、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、当該障害者の性別、年齢及び障害の状態に応じて、社会的障壁の除去の実施について必要かつ合理的な配慮（以下「合理的配慮」という。）の提供をしなければならない。これに当たり、職員は、別紙に定める留意事項に留意するものとする。

## かんりしや せきむ (管理者の責務)

だい じょう かんりしや きょういくいいんかい かんりしよく ぜん じょう しゅし ふ しょうがい りゆう  
第5条 管理者(教育委員会の管理職をいう。)は、前2条の趣旨を踏まえ、障害を理由  
とする差別の解消を推進するため、次に掲げる事項を実施しなければならない。

- (1) 日 常の執務を通じた指導等により、障害を理由とする差別の解消に関し、その管理  
している職員の注意を喚起し、障害を理由とする差別の解消に関する認識を深めさ  
せること。
- (2) 障害者等から不当な差別的取扱い、合理的配慮の不提供に対する相談、苦情の申出  
等があった場合は、迅速に状況を確認すること。
- (3) 合理的配慮の必要性が確認された場合、管理している職員に対して、合理的配慮の  
提供を適切に行うよう指導すること。

2 管理者は、障害を理由とする差別に関する問題が生じた場合には、迅速かつ適切に対処  
しなければならない。

## そうだんたいせい せいび (相談体制の整備)

だい じょう しょういん しょうがい りゆう さべつ かん しょうがいしやおよ かぞく た かんけいしや  
第6条 職員による障害を理由とする差別に関する障害者及びその家族その他の関係者  
からの相談等に的確に対応するため、相談窓口を教育委員会事務局管理部総務課、教  
職員課及び学びの変革推進部特別支援教育課に置く。

- 2 相談等を受ける場合は、性別、年齢、障害の状態等に配慮するとともに、対面のほか、  
電話、ファックス、電子メールに加え、障害者が他人とコミュニケーションを図る際に  
障害の特性に応じて必要となる多様な手段を可能な範囲で用意して対応するものとする。
- 3 相談者の用意した意思疎通のための器具や手段については、原則として利用を認めると  
ともに、相談者の意思疎通を補助し、又は支援する同伴者については、原則として同席を  
認めるものとする。
- 4 相談窓口に寄せられた相談等は、相談者の意向やプライバシーに配慮しつつ、関係者等  
において、情報共有を図り、早期の解決に努めるものとする。
- 5 相談窓口は、プライバシーに配慮し、寄せられた相談等を以後の相談等において活用す  
るとともに、相談体制の充実に努めるものとする。

## たいおう そ ち (対応措置)

だい じょう そうだんまどぐち よ そうだんなど じじつかんけい ちょうさおよ かくにん けっか しょういん  
第7条 相談窓口に寄せられた相談等について、事実関係の調査及び確認の結果、職員が  
障害者に対して不当な差別的取扱いをした、又は、過度な負担がないにもかかわらず  
合理的配慮の提供をしなかったと確認された場合は、事案の内容や程度に応じ、懲戒処分  
を含む人事管理上の措置に付されることがある。

## けんしゅう けいはつ (研修・啓発)

だい じょう きょういくいいんかいじむきょくかんりぶそうむかまた まな へんかくすいしんぶこべつさいてき まな たんとう  
第8条 教育委員会事務局管理部総務課又は学びの変革推進部個別最適な学び担当におい

て、障害を理由とする差別の解消の推進を図るため、職位や業務に応じて、法や基本方針等の周知や、障害者から話を聞く機会を設けるなど必要な研修・啓発を行うものとする。

2 特に、新たに職員となった者に対しては、障害を理由とする差別の解消に関する基本的な事項について理解させるために、また、新たに管理者となった職員に対しては、障害を理由とする差別の解消等に関し求められる役割について理解させるために、それぞれ、必要な研修を実施するものとする。

3 職員に対し、研修資料及び啓発資料により、障害の特性や多様性を理解させ、性別や年齢等にも配慮しつつ、障害者に適切に対応するよう、意識の啓発を図るものとする。

#### 附 則

この要領は、平成28年4月1日から施行する。

#### 附 則

この改正対応要領は、令和6年4月1日から施行する。

## 別紙

# 障害を理由とする差別の解消の推進に関する広島県教育関係職員対応要領に係る留意事項

## 第1 不当な差別的取扱いの基本的な考え方

法は、障害者に対して、正当な理由なく、障害を理由として、財・サービスや各種機会の提供を拒否する又は提供に当たって場所・時間帯などを制限する、障害者でない者に対しては付さない条件を付けることなどにより、障害者の権利利益を侵害することを禁止している。

なお、車椅子、補助犬その他の支援機器等の使用や介助者の付添い等の社会的障壁を解消するための手段の利用等を行われる不当な差別的取扱いも、障害を理由とする不当な差別的取扱いに該当する。

また、障害者の事実上の平等を促進し、又は達成するために必要な特別の措置は、不当な差別的取扱いではない。したがって、障害者を障害者でない者と比べて優遇する取扱い（いわゆる積極的改善措置）、法に規定された障害者に対する合理的配慮の提供による障害者でない者との異なる取扱いや、合理的配慮を提供等するために必要な範囲で、プライバシーに配慮しつつ障害者に障害の状況等を確認することは、不当な差別的取扱いには当たらない。

このように、不当な差別的取扱いとは、正当な理由なく、障害者を、問題となる事務又は事業について、本質的に関係する諸事情が同じ障害者でない者より不利に扱うことである点に留意する必要がある。

## 第2 正当な理由の判断の視点

正当な理由に相当するのは、障害者に対して、障害を理由として、財・サービスや各種機会の提供を拒否するなどの取扱いが客観的に見て正当な目的の下に行われたものであり、その目的に照らしてやむを得ないと言える場合である。教育委員会においては、正当な理由に相当するか否かについて、具体的な検討をせずに正当な理由を拡大解釈するなどして法の趣旨を損なうことなく、個別の事案ごとに、障害者、第三者の権利利益（例：安全の確保、財産の保全、損害発生防止等）及び教育委員会の事務又は事業の目的・内容・機能の維持等の観点に鑑み、具体的場面や状況に応じて総合的・客観的に判断することが必要である。

職員は、正当な理由があると判断した場合には、障害者にその理由を丁寧に説明するものとし、理解を得よう努めることが望ましい。その際、職員と障害者の双方が、お互いに相手の立場を尊重しながら相互理解を図ることが求められる。なお、理解が得られない場合には、相談窓口への相談を考慮することが望ましい。

## 第3 不当な差別的取扱いの例

正当な理由がなく、不当な差別的取扱いに該当すると考えられる例及び正当な理由があるため、不当な差別的取扱いに該当しないと考えられる例は以下のとおりである。なお、記載されている内容はあくまでも例示であり、これらの例だけに限られるものではないこと、正当な理由に相当するか否かについては、個別の事案ごとに、前述の観点等を踏まえて判断することが必要であること、正当な理由があり不当な差別的取扱いに該当しない場合であっても、合理的配慮の提供を求められる場合には別途の検討が必要であることに留意する。

## 1 正当な理由がなく、不当な差別的取扱いに該当すると考えられる例

- (1) 障害があることを理由として、一律に窓口対応を拒否し、又は対応の順序を後回しにする。
- (2) 障害があることを理由として、一律に書面の交付、資料の送付、パンフレットの提供、説明会やシンポジウムへの出席等を拒んだり、資料等に関する必要な説明を省いたりする。
- (3) 障害の種類や程度、サービス提供の場面における本人や第三者の安全性などについて考慮することなく、一律にあるいは漠然とした安全上の問題を理由に、施設等やそれらのサービスの利用を拒否する。
- (4) 障害があることを理由として、具体的な場面や状況に応じた検討を行うことなく、障害者に対し一律に、県立学校への入学の出願の受理、受験、入学、授業等の受講や研究指導、実習等校外教育活動、入寮、式典参加を拒み、また、これらを拒まない代わりとして正当な理由のない条件を付す。
- (5) 試験等において合理的配慮の提供を受けたことを理由に、当該試験等の結果を学習評価の対象から除外し、評価において差をつける。
- (6) 事務・事業の遂行上、特に必要ではないにもかかわらず、障害を理由に、来庁の際に付添者の同行を求めるなどの条件を付けたり、特に支障がないにもかかわらず、付添者の同行を拒んだりする。
- (7) 正当な理由がなく、身体障害者補助犬の同伴を拒否する。
- (8) 業務の遂行に支障がないにもかかわらず、障害者でない者とは異なる場所での対応を行う。
- (9) 障害があることを理由として、障害者に対して、言葉遣いや接客の態度など一律に接遇の質を下げる。

## 2 正当な理由があるため、不当な差別的取扱いに該当しないと考えられる例

- (1) 実習を伴う講座において、実習に必要な作業の遂行上具体的な危険の発生が見込まれる障害特性のある障害者に対し、当該実習とは別の実習を設定する。  
(障害者本人の安全確保の観点)
- (2) 車椅子の利用者が畳敷きの個室を希望した際に、敷物を敷く等、畳を保護するための対応を行う。(行政機関の損害発生防止の観点)

- (3) 行政手続きを行うため、障害者本人に同行した者が代筆しようとした際に、必要な範囲で、プライバシーに配慮しつつ、障害者本人に対し障害の状況や本人の手続の意思等を確認すること。(障害者本人の損害発生の防止の観点)
- (4) 施設等において、合理的配慮を提供等するために必要な範囲で、プライバシーに配慮しつつ、障害者である利用者に障害の状況等を確認する。
- (5) 通級による指導、特別支援学級及び特別支援学校において、特別の教育課程を編成する。
- (6) アレルギー疾患を有する障害のある児童生徒等の実習において、アレルゲンとなる材料を使用するなど、病気や障害の特性等によって実習に必要な作業の遂行上具体的な危険の発生が見込まれる場合、アレルゲンとならない材料に代替し、別の部屋で実習を設定する。

#### 第4 合理的配慮の基本的な考え方

- 1 障害者の権利に関する条約(以下「権利条約」という。)第2条において、「合理的配慮」は、「障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」と定義されている。

法は、権利条約における合理的配慮の定義を踏まえ、行政機関等に対し、その事務又は事業を行うに当たり、個々の場面において、障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において、その実施に伴う負担が過重でないときは、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、社会的障壁の除去の実施について、合理的配慮を行うことを求めている。合理的配慮は、障害者が受ける制限は、障害のみに起因するものではなく、社会における様々な障壁と相対することによって生ずるものとのいわゆる「社会モデル」の考え方を踏まえたものであり、障害者の権利利益を侵害することとならないよう、障害者が個々の場面において必要としている社会的障壁を除去するための必要かつ合理的な取組であり、その実施に伴う負担が過重でないものである。

- 2 合理的配慮は、教育委員会の事務又は事業の目的・内容・機能に照らし、必要とされる範囲で本来の業務に付随するものに限られること、障害者でない者との比較において同等の機会の提供を受けるためのものであること、事務又は事業の目的・内容・機能の本質的な変更には及ばないことに留意した上で、当該障害者が現に置かれている状況を踏まえ、社会的障壁の除去のための手段及び方法について、当該障害者本人の意向を尊重しつつ、「第5 過重な負担の基本的な考え方」に掲げる要素を考慮し、代替措置の選択も含め、双方の建設的対話による相互理解を通じて、必要かつ合理的な範囲で、柔軟に対応がなされる必要がある。建設的対話に当たっては、障害者にとっての社会的障壁を除去するた

め<sup>ひつよう</sup>の必要かつ実現可能な対応案<sup>じつげんかのう</sup>を障害者<sup>たいおうあん</sup>と職員<sup>しょうがいしゃ</sup>が共に<sup>しょういん</sup>考えていくために、双方<sup>とも</sup>がお互い<sup>かんが</sup>の状況<sup>そうほう</sup>の理解<sup>たが</sup>に努めることが重要<sup>たが</sup>である。例えば、障害者本人<sup>じょうきょう</sup>が社会的障壁<sup>りかい</sup>の除去<sup>つと</sup>のために<sup>じゅうよう</sup>、障害者本人<sup>たど</sup>が社会的障壁<sup>しょうがいしゃほんにん</sup>の除去<sup>しゃかいてきしょうへき</sup>のために<sup>じょきよ</sup>、<sup>ふだんこう</sup>普段<sup>たいさく</sup>講じている対策<sup>きょういくいんかい</sup>や、<sup>たいおうかのう</sup>教育委員会<sup>とりくみなど</sup>として<sup>たいわ</sup>対応可能な取組等<sup>なか</sup>を対話<sup>きょうゆう</sup>の中で共有<sup>など</sup>する等<sup>けんせつてきたいわ</sup>、<sup>つう</sup>建設的対話<sup>そうごりかい</sup>を通じて<sup>ふか</sup>相互理解<sup>さきざま</sup>を深め、<sup>じゅうなん</sup>様々な対応策<sup>けんとう</sup>を柔軟<sup>じゅうなん</sup>に検討<sup>けんとう</sup>していくことが<sup>えんかつ</sup>円滑<sup>たいおう</sup>な対応<sup>し</sup>に資<sup>かんが</sup>すると考<sup>ごうりてきはいりよ</sup>えられる。さらに、合理的配慮<sup>ないよう</sup>の内容<sup>ぎじゅつ</sup>は、技術<sup>しんてん</sup>の進展<sup>しゃかいじょうせい</sup>、社会情勢<sup>へんかなど</sup>の変化等<sup>おう</sup>に応じて<sup>え</sup>変わり得<sup>ごうりてきはいりよ</sup>るものである。合理的配慮<sup>ていきょう</sup>の提供<sup>あ</sup>に当たっては、障害者<sup>しょうがいしゃ</sup>の性別<sup>せいべつ</sup>、年齢<sup>ねんれい</sup>、状態等<sup>じょうたいなど</sup>に配慮<sup>はいりよ</sup>するものとし、特に障害<sup>とく</sup>のある女性<sup>しょうがい</sup>に対しては、障害<sup>じよせい</sup>に加えて女性<sup>しょうがい</sup>であること<sup>くわ</sup>も踏<sup>じよせい</sup>まえた対応<sup>くわ</sup>が求め<sup>じよせい</sup>られることに留意<sup>じよせい</sup>する。

なお、障害者<sup>しょうがいしゃ</sup>との関係性<sup>かんけいせい</sup>が長期<sup>ちようき</sup>にわたる場合等<sup>ばあいなど</sup>には、その都度<sup>つと</sup>の合理的配慮<sup>ごうりてきはいりよ</sup>とは別に、<sup>こうじゅつ</sup>後述<sup>かんきょう</sup>する環境<sup>せいび</sup>の整備<sup>こうりよ</sup>を考慮<sup>い</sup>に入れることにより、中・長期<sup>ちゅう</sup>的<sup>ちようきてき</sup>なコスト<sup>さくげん</sup>の削減<sup>こうりつか</sup>・効率化<sup>こうりつか</sup>につながる<sup>てん</sup>点は重要<sup>じゅうよう</sup>である。

3 意思<sup>いし</sup>の表明<sup>ひょうめい</sup>に当たっては、具体的場面<sup>あ</sup>において、社会的障壁<sup>ぐたいてきげん</sup>の除去<sup>しゃかいてきしょうへき</sup>に関する配慮<sup>じょきよ</sup>を必要<sup>かん</sup>としている<sup>はいりよ</sup>状況<sup>ひつよう</sup>にあること<sup>じょうきょう</sup>を言語<sup>げんご</sup>（手話<sup>しゅわ</sup>を含む<sup>ふく</sup>。）のほか、<sup>てんじ</sup>点字<sup>かくだいもじ</sup>、拡大文字<sup>ようやくひつき</sup>、要約筆記<sup>ひつだん</sup>、筆談<sup>ひつだん</sup>、<sup>こうわ</sup>口話<sup>え</sup>、絵カード<sup>じつぶつ</sup>、コミュニケーションボード<sup>ていじ</sup>、実物<sup>みぶ</sup>の提示<sup>など</sup>や身振りサイン等<sup>あいず</sup>による合図<sup>あいず</sup>、<sup>しよつかく</sup>触覚<sup>いし</sup>による意思伝達<sup>しでんたつ</sup>など、<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者<sup>たにん</sup>が他人<sup>はか</sup>とコミュニケーション<sup>さい</sup>を図<sup>ひつよう</sup>る際に必要<sup>しゅだん</sup>な手段<sup>しゅだん</sup>（手話通訳等<sup>しゅわつうやくなど</sup>の通訳<sup>つうやく</sup>を介<sup>かい</sup>するものやICT機器<sup>きき</sup>によるものを含む<sup>ふく</sup>。）により伝えられる。

また、障害者<sup>しょうがいしゃ</sup>からの意思表明<sup>いしひょうめい</sup>のみでなく、障害<sup>しょうがい</sup>の特性等<sup>とくせいなど</sup>により本人<sup>ほんにん</sup>の意思表明<sup>いしひょうめい</sup>が困難<sup>こんなん</sup>な場合<sup>ばあい</sup>には、<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者<sup>かぞく</sup>の家族<sup>しえんしゃ</sup>、<sup>かいじょしゃ</sup>支援者<sup>かいじょしゃ</sup>・介助者<sup>ほうていだりになんなど</sup>、<sup>ほうていだりになんなど</sup>法定代理人等<sup>しえん</sup>、<sup>しえん</sup>コミュニケーション<sup>しえん</sup>を支援<sup>しえん</sup>する者が本人<sup>もの</sup>を補佐<sup>ほんにん</sup>して行<sup>ほさ</sup>う意思<sup>おこな</sup>の表明<sup>いし</sup>も含む<sup>ひょうめい</sup>。

なお、意思<sup>いし</sup>の表明<sup>ひょうめい</sup>が困難<sup>こんなん</sup>な障害者<sup>しょうがいしゃ</sup>が、<sup>かぞく</sup>家族<sup>しえんしゃ</sup>、<sup>かいじょしゃ</sup>支援者<sup>かいじょしゃ</sup>・介助者<sup>ほうていだりになんなど</sup>、<sup>ともな</sup>法定代理人等<sup>ともな</sup>を伴<sup>ともな</sup>っていない場合<sup>ともな</sup>など、意思<sup>いし</sup>の表明<sup>ひょうめい</sup>がない場合<sup>ばあい</sup>であっても、当該<sup>ばあい</sup>障害者<sup>いし</sup>が社会的障壁<sup>ひょうめい</sup>の除去<sup>ばあい</sup>を必要<sup>いし</sup>としていることが明白<sup>ひょうめい</sup>である場合には、<sup>ほう</sup>法の趣旨<sup>しゅし</sup>に鑑<sup>かんが</sup>みれば、当該<sup>いし</sup>障害者<sup>いし</sup>に対して<sup>いし</sup>必要<sup>いし</sup>としていることが明白<sup>いし</sup>である場合には、<sup>ほう</sup>法の趣旨<sup>しゅし</sup>に鑑<sup>かんが</sup>みれば、当該<sup>いし</sup>障害者<sup>いし</sup>に対して<sup>いし</sup>適切<sup>いし</sup>と思われる配慮<sup>いし</sup>を提案<sup>いし</sup>するために建設的対話<sup>いし</sup>を働<sup>いし</sup>きかけるなど、自主的<sup>いし</sup>な取組<sup>いし</sup>に努め<sup>いし</sup>ることが望ましい<sup>いし</sup>。

4 合理的配慮<sup>ごうりてきはいりよ</sup>は、不特定多数<sup>ふとくていたすう</sup>の障害者等<sup>しょうがいしゃなど</sup>の利用<sup>りよう</sup>を想定<sup>そうてい</sup>して事前<sup>じぜん</sup>に行<sup>おこな</sup>われる建築物<sup>けんちくぶつ</sup>のバリアフリー化<sup>か</sup>、介助者<sup>かいじょしゃ</sup>や支援者<sup>しえんしゃ</sup>等の人的支援<sup>じんてきしえん</sup>、情報<sup>じょうほう</sup>アクセシビリティ<sup>こうじょうなど</sup>の向上<sup>かんきょう</sup>等の環境<sup>かんきょう</sup>の整備<sup>せいび</sup>を基礎<sup>きそ</sup>として、<sup>しょうがいしゃ</sup>個々<sup>たい</sup>の障害者<sup>じょうきょう</sup>に対して、その状況<sup>じょうきょう</sup>に応じて個別<sup>こべつ</sup>に実施<sup>じっし</sup>される措置<sup>そち</sup>である。したがって、各場面<sup>かくばめん</sup>における環境<sup>かんきょう</sup>の整備<sup>せいび</sup>の状況<sup>じょうきょう</sup>により、合理的配慮<sup>ごうりてきはいりよ</sup>の内容<sup>ないよう</sup>は異なることとなる。また、<sup>しょうがい</sup>障害<sup>じょうたいなど</sup>の状態等<sup>へんか</sup>が変化<sup>とく</sup>することもあるため、特に、<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者<sup>かんけい</sup>との関係<sup>かんけい</sup>性が長期<sup>ちようき</sup>にわたる場合等<sup>ばあいなど</sup>には、提供<sup>ていきょう</sup>する合理的配慮<sup>ごうりてきはいりよ</sup>について、適宜<sup>てきぎ</sup>、見直し<sup>みなお</sup>を行<sup>おこな</sup>うことが重要<sup>じゅうよう</sup>である。なお、多数<sup>たすう</sup>の障害者<sup>しょうがいしゃ</sup>が直面<sup>ちよくめん</sup>し得<sup>え</sup>る社会的障壁<sup>しゃかいてきしょうへき</sup>をあらかじめ除去<sup>じょきよ</sup>すると、<sup>かんてん</sup>この観点<sup>た</sup>から、他の<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者等<sup>はきゅうこうか</sup>への波及<sup>こうりよ</sup>効果<sup>かんきょう</sup>についても考慮<sup>せいび</sup>した環境<sup>おこな</sup>の整備<sup>おこな</sup>を行<sup>おこな</sup>うことや、<sup>そうだん</sup>相談<sup>ふんそうじあん</sup>・紛争<sup>じぜん</sup>事案<sup>ぼうし</sup>を事前<sup>かんてん</sup>に防止<sup>ごうりてきはいりよ</sup>する観点<sup>ていきょう</sup>から、合理的配慮<sup>かん</sup>の提供<sup>そうだんたいおうなど</sup>に関する相談<sup>けいき</sup>対応<sup>けいき</sup>等を契機<sup>けいき</sup>に、<sup>ないぶぎそく</sup>内部規則<sup>など</sup>やマニュアル等<sup>せいどかいせいなど</sup>の制度改正<sup>かんきょう</sup>等の環境<sup>せいび</sup>の整備<sup>はか</sup>を図<sup>ゆうこう</sup>ることは有効<sup>ゆうこう</sup>である。

## 第5 過重な負担の基本的な考え方

過重な負担については、具体的な検討をせずに過重な負担を拡大解釈するなどして法の趣旨を損なうことなく、個別の事案ごとに、以下の要素等を考慮し、具体的場面や状況に  
応じて総合的・客観的に判断することが必要である。職員は、過重な負担にあ  
つた場合は、障害者に丁寧にその理由を説明するものとし、理解を得るよう努めることが望  
ましい。なお、理解が得られない場合には、相談窓口への相談を考慮することが望ましい。  
その際には前述のとおり、職員と障害者の双方が、お互いに相手の立場を尊重しながら、  
建設的対話を通じて相互理解を図り、代替措置の選択も含めた対応を柔軟に検討することが  
求められる。

- 1 事務又は事業への影響の程度（事務又は事業の目的、内容、機能を損なうか否か）
- 2 実現可能性の程度（物理的・技術的制約、人的・体制上の制約）
- 3 費用・負担の程度

## 第6 合理的配慮に関する留意点

幼児、児童及び生徒に対する合理的配慮の提供については、「文部科学省所管事業分野に  
おける障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針」（平成27年文部科学省告示第  
180号）別紙2「学校教育分野」の2（1）において、主として以下の点に留意することが  
示されている。

ア 合理的配慮の合意形成に当たっては、権利条約第24条第1項にある、人間の多様性の  
尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由  
な社会に効果的に参加することを可能とするといった目的に合致するかどうかの観点から  
検討が行われることが重要である。

イ 合理的配慮は、一人一人の障害の状態や教育的ニーズ等に応じ、設置者・学校  
（学校教育法（昭和22年法律第26号）第1条に規定する学校（大学及び高等専門学校  
を除く。）をいう。以下同じ。）及び本人・保護者により、発達の段階を考慮しつつ合意形成  
を図った上で提供されることが望ましく、その内容を個別の教育支援計画に明記するこ  
とが重要である。

ウ 合理的配慮の合意形成後も、幼児、児童及び生徒一人一人の発達の程度、適応の状  
況等を勘案しながら柔軟に見直しができることを共通理解とすることが重要である。

エ 合理的配慮は、障害者がその能力を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果  
的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ  
仕組みであるインクルーシブ教育システムの理念に照らし、その障害のある幼児、児童  
及び生徒が十分な教育が受けられるために提供できているかという観点から評価する  
ことが重要である。例えば、個別の教育支援計画や個別の指導計画について、各学校に  
おいて計画に基づき実行した結果を評価して定期的に見直すなど、PDCAサイクルを  
確立させていくことが重要である。

オ 進学や進級等の移行時においても途切れることのない一貫した支援を提供するため、個別の教育支援計画の引継ぎ、学校間や関係機関も含めた情報交換等により、合理的配慮の引継ぎを行うことが必要である。

## 第7 合理的配慮の例

第4で示したとおり、合理的配慮は、具体的場面や状況に応じて異なり、多様かつ個別性の高いものであるが、例としては、次のようなものがある。

なお、記載した例については、第5で示した過重な負担が存在しないことを前提としていること、また、これらはいくまでも例示であり、必ず実施するものではないこと、記載されている例以外であっても合理的配慮に該当するものがあることに留意する必要がある。

### 1 合理的配慮に当たり得る物理的環境への配慮の例

- (1) 災害時の警報音、緊急連絡等が聞こえにくい障害者に対し、職員が直接災害を知らせたり、緊急情報・館内放送を視覚的に受容することができる警報設備・電光表示機器等を用意したり、掲示板・手書きのボード等を用いて分かりやすく案内したりする。
- (2) 聴覚過敏の児童生徒等のために教室の机・椅子の脚に緩衝材を付けて雑音を軽減する、視覚情報の処理が苦手な児童生徒等のために黒板周りの掲示物等の情報量を減らすなど、個別の事案ごとに特性に応じて教室環境を変更する。
- (3) 目的の場所までの案内の際に、障害者の歩行速度に合わせた速度で歩いたり、介助する位置（左右・前後・距離等）について、障害者の希望を聞いたりする。
- (4) 保護者、支援員等の教室への入室、授業や試験でのパソコン入力支援、移動支援、待合室での待機を許可する。
- (5) 段差がある場合に、車椅子利用者にキャスター上げ等の補助をする、携帯スロープを渡すなどする。
- (6) 配架棚の高い所に置かれたパンフレット等を取って渡す。パンフレット等の位置を分かりやすく伝える。
- (7) 障害の特性により、頻繁に離席の必要がある場合に、会場の座席位置を扉付近にする。
- (8) 疲労を感じやすい障害者から別室での休憩の申し出があった際、別室の確保が困難であったことから、当該障害者に事情を説明し、対応窓口の近くに長椅子を移動させて臨時的な休憩スペースを設ける。
- (9) 不随意運動等により書類等を押さえることが難しい障害者に対し、職員が書類をおさえたり、バインダー等の固定器具を提供したりする。
- (10) 施設内の点字ブロック上に障害物を置かない。
- (11) 施設等において、障害のある子供が必要以上の発声やこだわりのある行動をしてしまう場合に、保護者から子供の特性やコミュニケーションの方法等について聞き取っ

た上で、<sup>たうえ</sup>落ち着かない<sup>お</sup>様子<sup>つ</sup>のときは<sup>ようす</sup>個室<sup>こしつ</sup>等に<sup>など</sup>誘導<sup>ゆうどう</sup>する。

- (12) 視覚<sup>しかく</sup>障害<sup>しょうがい</sup>のある者<sup>もの</sup>からトイレ<sup>こしつ</sup>の個室<sup>あんない</sup>を案内<sup>もと</sup>するよう求め<sup>ばあい</sup>があった場合に、求め<sup>もと</sup>に応じて<sup>おう</sup>トイレ<sup>こしつ</sup>の個室<sup>あんない</sup>を案内<sup>さい</sup>する。その際<sup>どうせい</sup>、同性<sup>しよくいん</sup>の職員<sup>ばあい</sup>がいる場合は、障害<sup>しょうがい</sup>者本人<sup>しやほんにん</sup>の希望<sup>きぼう</sup>に応じて<sup>おう</sup>同性<sup>どうせい</sup>の職員<sup>しよくいん</sup>が案内<sup>あんない</sup>する。
- (13) 児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>など</sup>が医療<sup>いりやうてき</sup>的<sup>てき</sup>ケア<sup>ひつよう</sup>を必要<sup>ばあい</sup>とする場合<sup>しょうがい</sup>、障害<sup>しょうがい</sup>の状<sup>じょうたい</sup>態<sup>とくせい</sup>や特性<sup>はいりよ</sup>に配慮<sup>はいりよ</sup>しながら、医療<sup>いりやうてき</sup>的<sup>てき</sup>ケア<sup>ひつよう</sup>の実施<sup>じっし</sup>のための<sup>べつしつ</sup>別室<sup>など</sup>等<sup>ようい</sup>を用意<sup>えいせい</sup>するなど、衛<sup>えい</sup>生<sup>せい</sup>的<sup>てき</sup>な環<sup>かん</sup>境<sup>きやう</sup>を提供<sup>ていきやう</sup>する。

## 2 合理的<sup>ごうりてき</sup>配慮<sup>はいりよ</sup>に当<sup>あ</sup>たり得<sup>え</sup>る情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>の取<sup>しゆ</sup>得<sup>とく</sup>、利<sup>り</sup>用<sup>りやう</sup>及<sup>およ</sup>び意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>疎<sup>そ</sup>通<sup>つう</sup>へ<sup>へ</sup>の配<sup>はい</sup>慮<sup>りよ</sup>の例<sup>れい</sup>

- (1) 点<sup>てん</sup>字<sup>じ</sup>、拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>、触<sup>しゆ</sup>覚<sup>かく</sup>による意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>伝<sup>でん</sup>達<sup>たつ</sup>等<sup>など</sup>、要<sup>よう</sup>約<sup>やく</sup>筆<sup>ひつ</sup>記<sup>き</sup>、筆<sup>ひつ</sup>談<sup>だん</sup>、絵<sup>え</sup>カ<sup>か</sup>ード、コ<sup>こ</sup>ミュ<sup>み</sup>ニケ<sup>け</sup>ーシ<sup>し</sup>ョ<sup>ョ</sup>ンボ<sup>ぼ</sup>ード、読<sup>よ</sup>み上<sup>あ</sup>げ、手<sup>て</sup>話<sup>わ</sup>等<sup>など</sup>のコ<sup>こ</sup>ミュ<sup>み</sup>ニケ<sup>け</sup>ーシ<sup>し</sup>ョ<sup>ョ</sup>ン手<sup>て</sup>段<sup>だん</sup>（I<sup>い</sup>C<sup>し</sup>T<sup>と</sup>機<sup>き</sup>器<sup>き</sup>によるもの<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>含<sup>ふ</sup>む。）を<sup>を</sup>用<sup>もち</sup>いる。特<sup>とく</sup>に、意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>疎<sup>そ</sup>通<sup>つう</sup>が不<sup>ふ</sup>得<sup>とく</sup>意<sup>い</sup>な障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>者<sup>たい</sup>に<sup>たい</sup>しては、絵<sup>え</sup>カ<sup>か</sup>ード、コ<sup>こ</sup>ミュ<sup>み</sup>ニケ<sup>け</sup>ーシ<sup>し</sup>ョ<sup>ョ</sup>ンボ<sup>ぼ</sup>ード等<sup>など</sup>を<sup>を</sup>活<sup>かつ</sup>用<sup>よう</sup>して意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>を<sup>を</sup>確<sup>かく</sup>認<sup>にん</sup>する。
- (2) 情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>保<sup>ほ</sup>障<sup>しょう</sup>の観<sup>かん</sup>点<sup>てん</sup>から、見<sup>み</sup>えに<sup>に</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>に<sup>に</sup>応<sup>おう</sup>じた情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>の提<sup>てい</sup>供<sup>きょう</sup>（聞<sup>き</sup>くこ<sup>こ</sup>とで内<sup>ない</sup>容<sup>りやう</sup>が理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>で<sup>で</sup>きる説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>・資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>や、拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>や、拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>又<sup>また</sup>は点<sup>てん</sup>字<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>用<sup>もち</sup>いた資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>、カ<sup>か</sup>ラ<sup>ら</sup>ーユ<sup>ゆ</sup>ニ<sup>に</sup>バ<sup>バ</sup>ーサ<sup>サ</sup>ル<sup>ル</sup>デ<sup>デ</sup>ザ<sup>ザ</sup>イ<sup>イ</sup>ンに<sup>に</sup>配<sup>はい</sup>慮<sup>りよ</sup>した資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>、遠<sup>と</sup>くのもの<sup>もの</sup>や動<sup>どう</sup>き<sup>き</sup>の速<sup>すみ</sup>いもの<sup>もの</sup>など<sup>など</sup>触<sup>さわ</sup>るこ<sup>こ</sup>とが<sup>が</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>ないもの<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>確<sup>かく</sup>認<sup>にん</sup>で<sup>で</sup>きる模<sup>も</sup>型<sup>けい</sup>や写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>等<sup>など</sup>の提<sup>てい</sup>供<sup>きょう</sup>）、聞<sup>き</sup>こえに<sup>に</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>に<sup>に</sup>応<sup>おう</sup>じた視<sup>しかく</sup>覚<sup>かく</sup>的<sup>てき</sup>な情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>の提<sup>てい</sup>供<sup>きょう</sup>、見<sup>み</sup>えに<sup>に</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>と聞<sup>き</sup>こえに<sup>に</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>の両<sup>りやう</sup>方<sup>ほう</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>る場<sup>ばあい</sup>合<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>応<sup>おう</sup>じた情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>の提<sup>てい</sup>供<sup>きょう</sup>（手<sup>て</sup>のひ<sup>ひ</sup>らに<sup>に</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>書<sup>か</sup>いて<sup>いて</sup>伝<sup>でん</sup>え<sup>え</sup>る等<sup>など</sup>、活<sup>かつ</sup>動<sup>どう</sup>や場<sup>ばしょ</sup>所<sup>て</sup>の手<sup>て</sup>が<sup>が</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>なるもの<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>示<sup>しめ</sup>す）、知<sup>ち</sup>的<sup>てき</sup>障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>に<sup>に</sup>配<sup>はい</sup>慮<sup>りよ</sup>した情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>の提<sup>てい</sup>供<sup>きょう</sup>（伝<sup>でん</sup>え<sup>え</sup>る内<sup>ない</sup>容<sup>りやう</sup>の要<sup>よう</sup>点<sup>てん</sup>を<sup>を</sup>筆<sup>ひつ</sup>記<sup>き</sup>する、漢<sup>かん</sup>字<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>ル<sup>る</sup>ビ<sup>び</sup>を<sup>を</sup>振<sup>ふ</sup>る、単<sup>たん</sup>語<sup>ご</sup>や文<sup>ぶん</sup>節<sup>せつ</sup>の区<sup>く</sup>切<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>空<sup>くう</sup>白<sup>はく</sup>を<sup>を</sup>挟<sup>はさ</sup>んで<sup>で</sup>記<sup>き</sup>述<sup>じゆつ</sup>する「分<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>ち<sup>ち</sup>書<sup>か</sup>き」に<sup>に</sup>する、な<sup>な</sup>じ<sup>じ</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>い外<sup>がい</sup>来<sup>らい</sup>語<sup>ご</sup>は<sup>は</sup>避<sup>さ</sup>け<sup>け</sup>る等<sup>など</sup>）を<sup>を</sup>行<sup>おこな</sup>うこ<sup>こ</sup>と。ま<sup>また</sup>、そ<sup>その</sup>の<sup>の</sup>際<sup>さい</sup>、各<sup>かく</sup>媒<sup>ばい</sup>体<sup>たい</sup>間<sup>かん</sup>で<sup>で</sup>ペ<sup>ぺ</sup>ー<sup>じ</sup>番<sup>ばん</sup>号<sup>ごう</sup>等<sup>など</sup>が<sup>が</sup>異<sup>い</sup>なり<sup>り</sup>得<sup>とく</sup>るこ<sup>こ</sup>とに<sup>に</sup>留<sup>りゆう</sup>意<sup>い</sup>して<sup>して</sup>使<sup>し</sup>用<sup>よう</sup>する。
- (3) 知<sup>ち</sup>的<sup>てき</sup>障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>のある利<sup>り</sup>用<sup>りやう</sup>者<sup>しや</sup>等<sup>など</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>し、抽<sup>ちゆう</sup>象<sup>しょう</sup>的<sup>てき</sup>な言<sup>ご</sup>語<sup>ご</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>く、具<sup>ぐ</sup>体<sup>たい</sup>的<sup>てき</sup>な言<sup>ご</sup>語<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>使<sup>つか</sup>うこ<sup>こ</sup>と。例<sup>れい</sup>え<sup>え</sup>ば、「手<sup>て</sup>続<sup>つづ</sup>き」や「申<sup>しん</sup>請<sup>せい</sup>」な<sup>な</sup>どのサ<sup>さ</sup>ー<sup>ブ</sup>イ<sup>い</sup>スを<sup>を</sup>受<sup>う</sup>ける際<sup>さい</sup>に<sup>に</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>な言<sup>ご</sup>語<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>を<sup>を</sup>短<sup>たん</sup>い<sup>い</sup>言<sup>ご</sup>語<sup>ご</sup>で<sup>で</sup>分<sup>わ</sup>かり<sup>り</sup>や<sup>や</sup>す<sup>す</sup>く具<sup>ぐ</sup>体<sup>たい</sup>的<sup>てき</sup>に<sup>に</sup>説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>して、当<sup>たう</sup>該<sup>がい</sup>利<sup>り</sup>用<sup>りやう</sup>者<sup>しや</sup>等<sup>など</sup>が<sup>が</sup>理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>して<sup>して</sup>い<sup>い</sup>るか<sup>か</sup>を<sup>を</sup>確<sup>かく</sup>認<sup>にん</sup>する。
- (4) 言<sup>ご</sup>語<sup>ご</sup>だ<sup>だけ</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>聞<sup>き</sup>いて<sup>いて</sup>理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>するこ<sup>こ</sup>とや言<sup>ご</sup>語<sup>ご</sup>だ<sup>だけ</sup>け<sup>け</sup>での意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>疎<sup>そ</sup>通<sup>つう</sup>に<sup>に</sup>困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>がある障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>者<sup>たい</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>し、絵<sup>え</sup>や写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>カ<sup>か</sup>ード、コ<sup>こ</sup>ミュ<sup>み</sup>ニケ<sup>け</sup>ーシ<sup>し</sup>ョ<sup>ョ</sup>ンボ<sup>ぼ</sup>ード、タ<sup>た</sup>ブ<sup>ぶ</sup>レ<sup>れ</sup>ッ<sup>つ</sup>ト<sup>と</sup>端<sup>たん</sup>末<sup>まつ</sup>等<sup>など</sup>のI<sup>い</sup>C<sup>し</sup>T<sup>と</sup>機<sup>き</sup>器<sup>き</sup>の活<sup>かつ</sup>用<sup>よう</sup>、視<sup>しかく</sup>覚<sup>かく</sup>的<sup>てき</sup>に<sup>に</sup>伝<sup>でん</sup>え<sup>え</sup>るた<sup>た</sup>め<sup>め</sup>の情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>の文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>化<sup>か</sup>、質<sup>しつ</sup>問<sup>もん</sup>内<sup>ない</sup>容<sup>りやう</sup>を「は<sup>はい</sup>い」又<sup>また</sup>は「い<sup>いい</sup>え」で<sup>で</sup>端<sup>たん</sup>的<sup>てき</sup>に<sup>に</sup>答<sup>こた</sup>え<sup>え</sup>ら<sup>ら</sup>れるよ<sup>よ</sup>うに<sup>に</sup>す<sup>す</sup>ること<sup>こと</sup>など<sup>など</sup>により<sup>い</sup>意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>を<sup>を</sup>確<sup>かく</sup>認<sup>にん</sup>したり、本<sup>ほん</sup>人<sup>にん</sup>の自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>選<sup>せん</sup>択<sup>たく</sup>・自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>決<sup>けつ</sup>定<sup>てい</sup>を<sup>を</sup>支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>する。
- (5) 比<sup>ひ</sup>喩<sup>ゆ</sup>表<sup>ひょう</sup>現<sup>げん</sup>等<sup>など</sup>の理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>が<sup>が</sup>困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>な障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>者<sup>たい</sup>に<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>し、比<sup>ひ</sup>喩<sup>ゆ</sup>や暗<sup>あん</sup>喩<sup>ゆ</sup>、二<sup>に</sup>重<sup>じゆう</sup>否<sup>ひ</sup>定<sup>てい</sup>表<sup>ひょう</sup>現<sup>げん</sup>な<sup>な</sup>どを<sup>を</sup>用<sup>もち</sup>い<sup>い</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>する。
- (6) 会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>等<sup>など</sup>に<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>いて、点<sup>てん</sup>字<sup>じ</sup>、拡<sup>かく</sup>大<sup>だい</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>等<sup>など</sup>で<sup>で</sup>作<sup>さく</sup>成<sup>せい</sup>する際<sup>さい</sup>に、各<sup>お</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>媒<sup>ばい</sup>体<sup>たい</sup>間<sup>かん</sup>で<sup>で</sup>ペ<sup>ぺ</sup>ー<sup>じ</sup>番<sup>ばん</sup>号<sup>ごう</sup>等<sup>など</sup>が<sup>が</sup>異<sup>い</sup>なり<sup>り</sup>得<sup>とく</sup>るこ<sup>こ</sup>とに<sup>に</sup>留<sup>りゆう</sup>意<sup>い</sup>して<sup>して</sup>使<sup>し</sup>用<sup>よう</sup>する。
- (7) 視<sup>しかく</sup>覚<sup>かく</sup>障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>のある出<sup>しゅつ</sup>席<sup>せき</sup>者<sup>しや</sup>に<sup>に</sup>会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>等<sup>など</sup>を<sup>を</sup>事<sup>じ</sup>前<sup>ぜん</sup>送<sup>そう</sup>付<sup>ふ</sup>する際<sup>さい</sup>、読<sup>よ</sup>み上<sup>あ</sup>げソ<sup>そ</sup>フ<sup>ふ</sup>トに<sup>に</sup>対<sup>たい</sup>応<sup>おう</sup>で<sup>で</sup>きるよ<sup>よ</sup>う電<sup>でん</sup>子<sup>し</sup>デ<sup>で</sup>ー<sup>タ</sup>（テ<sup>て</sup>キ<sup>き</sup>ス<sup>す</sup>ト形<sup>けい</sup>式<sup>しき</sup>）で<sup>で</sup>提<sup>てい</sup>供<sup>きょう</sup>する。
- (8) 駐<sup>ちゆう</sup>車<sup>しゃ</sup>場<sup>じやう</sup>、会<sup>かい</sup>場<sup>じやう</sup>入<sup>いり</sup>口<sup>ぐち</sup>な<sup>な</sup>どで<sup>で</sup>通<sup>つう</sup>常<sup>じょう</sup>、口<sup>こう</sup>頭<sup>とう</sup>で<sup>で</sup>行<sup>おこな</sup>う案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>を、紙<sup>かみ</sup>に<sup>に</sup>メ<sup>め</sup>モ<sup>も</sup>を<sup>を</sup>し<sup>して</sup>渡<sup>わた</sup>す。

- (9) 書類記入の依頼時に、記入方法等を本人の目の前で示したり、分かりやすい記述で伝達したりする。本人の依頼がある場合には、代読や代筆といった配慮を行う。
- (10) 障害者から申出があった際に、ゆっくり、丁寧に、繰り返し説明し、内容が理解されたことを確認しながら対応する。また、なじみのない外来語は避ける、漢数字は用いない、時刻は24時間表記ではなく午前・午後で表記するなどの配慮を念頭に置いたメモを、必要に応じて適時に渡す。
- (11) 会議の進行に当たり、資料を見ながら説明を聞くことが困難な視覚又は聴覚に障害のある出席者や知的障害のある出席者に対し、ゆっくり、誰が話しているのか分かるように挙手して話す、一人ずつ話すなど丁寧な進行を心がけるなどの配慮を行う。
- (12) 会議の進行に当たっては、出席者の障害の特性に合ったサポートを行う、また介助者や支援者の同席を認めるなどの可能な範囲での配慮を行う。

### 3 ルール・慣行の柔軟な変更の例

- (1) 事務手続きの際に、職員や教員が必要書類の代筆を行う。
- (2) 障害者が立って列に並んで順番を待っている場合に、周囲の理解を得た上で、当該障害者の順番が来るまで別室や椅子を用意する。
- (3) 他人との接触、多人数の中にいることによる緊張のため、不随意の発声等がある場合、緊張を緩和するため、当該障害者に説明の上、施設の状況に応じて別室を用意する。
- (4) 移動に困難のある障害者を早めに入場させ椅子に誘導したり、車椅子を使用する障害者の希望に応じて、決められた車椅子用以外の客席も使用できるようにする。
- (5) 入学試験や検定試験において、本人・保護者の希望、障害の状況等を踏まえ、別室での受験、試験時間の延長、点字や拡大文字、音声読み上げ機能の使用、車いすの持参使用等を許可する。
- (6) 点字や拡大文字、音声読み上げ機能を使用して学習する児童生徒等のために、授業で使用する教科書や資料、問題文を点訳又は拡大したものやテキストデータ等を事前に渡す。
- (7) 聞こえにくさのある児童生徒等に対し、外国語のヒアリングの際に、音質・音量を調整したり、文字による代替問題を用意する。
- (8) 知的障害のある児童生徒等に対し、抽象的な言葉や文章を説明する際、絵カード、文字カード、ICT機器等、分かりやすい教材・教具に代えて行う。
- (9) 肢体不自由のある児童生徒等に対し、体育の授業の際に、上・下肢の機能に応じてボール運動におけるボールの大きさや投げる距離を変えたり、走運動における走る距離を短くしたり、スポーツ用車椅子の使用を許可する。
- (10) 日常的に医療的ケアを要する児童生徒等に対し、本人が対応可能な場合もあることなどを含め、配慮を要する程度には個人差があることに留意して、医療機関や本人が日常的に支援を受けている介助者や支援者等と連携を図り、個々の状態や必要な

- 支援を丁寧<sup>しえん ていねい</sup>に確認<sup>かくにん</sup>し、過剰<sup>かじょう</sup>に活動<sup>かつどう</sup>の制限<sup>せいげん</sup>等<sup>な</sup>をしないようにする。
- (11) 慢性的<sup>まんせいてき</sup>な病氣<sup>びょうき</sup>等<sup>な</sup>のために他の<sup>た</sup>児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>と同じ<sup>おな</sup>ように運動<sup>うんどう</sup>ができない<sup>じどうせいとなど</sup>児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>に対し<sup>たい</sup>、運動<sup>うんどう</sup>量を<sup>りょうりょう</sup>軽減<sup>けいげん</sup>したり、代替<sup>だいたい</sup>できる<sup>うんどう</sup>運動<sup>うんどう</sup>を<sup>ようい</sup>用意<sup>ようい</sup>したりする<sup>な</sup>など、病氣<sup>びょうき</sup>等<sup>な</sup>の特性<sup>とくせい</sup>を理解<sup>りかい</sup>し、過度<sup>かど</sup>に<sup>よぼう</sup>予防<sup>よぼう</sup>または<sup>はいじょ</sup>排除<sup>はいじょ</sup>を<sup>さんか</sup>することなく、参加<sup>さんか</sup>するための<sup>くふう</sup>工夫<sup>くふう</sup>をする。
- (12) 病氣<sup>びょうき</sup>療<sup>りょう</sup>養<sup>よう</sup>等<sup>な</sup>のため<sup>な</sup>学習<sup>がくしゅう</sup>できない<sup>きかん</sup>期間<sup>きかん</sup>が生<sup>しょう</sup>じる<sup>じどうせいとなど</sup>児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>に対し<sup>たい</sup>、ICT<sup>い</sup>を<sup>かつよう</sup>活用<sup>かつよう</sup>した<sup>な</sup>学習<sup>がくしゅう</sup>活動<sup>かつどう</sup>や<sup>ほこう</sup>補<sup>おこな</sup>講<sup>な</sup>を行<sup>な</sup>う<sup>な</sup>など、学習<sup>がくしゅう</sup>機会<sup>きかい</sup>を<sup>かくほ</sup>確保<sup>ほうほう</sup>する<sup>な</sup>方法<sup>くふう</sup>を<sup>な</sup>工夫<sup>くふう</sup>する。
- (13) 読<sup>よ</sup>み・書<sup>か</sup>き等<sup>な</sup>に<sup>な</sup>困難<sup>こんなん</sup>のある<sup>じどうせいとなど</sup>児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>のために、授<sup>じゅ</sup>業<sup>ぎょう</sup>や<sup>しけん</sup>試験<sup>しけん</sup>において<sup>よ</sup>読<sup>よ</sup>みや<sup>じたい</sup>やすい<sup>な</sup>字体<sup>じたい</sup>による<sup>しりょう</sup>資料<sup>ざくせい</sup>を作成<sup>たんまつ</sup>したり、タブレット<sup>き</sup>端<sup>き</sup>末<sup>しりょう</sup>等<sup>な</sup>の<sup>き</sup>ICT<sup>き</sup>機器<sup>しりょう</sup>使用<sup>きよか</sup>を<sup>ひつき</sup>許可<sup>か</sup>したり、筆<sup>ひ</sup>記<sup>き</sup>に<sup>か</sup>代<sup>か</sup>えて<sup>な</sup>口頭<sup>こうとう</sup>試<sup>し</sup>問<sup>もん</sup>による<sup>がくしゅう</sup>学<sup>ひょう</sup>習<sup>か</sup>評<sup>おこな</sup>価<sup>な</sup>を行<sup>な</sup>ったりする。
- (14) 障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>の<sup>とくせい</sup>特性<sup>な</sup>等<sup>な</sup>により<sup>な</sup>人<sup>ひと</sup>前<sup>まえ</sup>での<sup>はつびょう</sup>発<sup>こん</sup>表<sup>なん</sup>が<sup>じどうせいとなど</sup>困難<sup>たい</sup>な<sup>な</sup>児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>に対し<sup>たい</sup>、必要<sup>ひつよう</sup>に応<sup>おう</sup>じて<sup>な</sup>代替<sup>だいたい</sup>措<sup>そ</sup>置<sup>ち</sup>として<sup>か</sup>レポ<sup>じどうせいとなど</sup>ート<sup>な</sup>を<sup>みずか</sup>課<sup>はつびょう</sup>す<sup>な</sup>こと<sup>な</sup>や、児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>が<sup>ろくが</sup>自<sup>じ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>な</sup>発<sup>はつびょう</sup>表<sup>な</sup>を<sup>な</sup>録<sup>ろく</sup>画<sup>が</sup>した<sup>な</sup>もの<sup>な</sup>を<sup>な</sup>発<sup>はつびょう</sup>表<sup>な</sup>用<sup>よう</sup>資<sup>しりょう</sup>料<sup>りょう</sup>として<sup>かつよう</sup>活<sup>な</sup>用<sup>な</sup>する。
- (15) 学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>全<sup>ぜん</sup>般<sup>ぱん</sup>において<sup>な</sup>、対<sup>たい</sup>人<sup>じん</sup>関<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>の<sup>けいせい</sup>形<sup>こん</sup>成<sup>なん</sup>に<sup>い</sup>困<sup>い</sup>難<sup>し</sup>があ<sup>つた</sup>ったり、意<sup>い</sup>思<sup>し</sup>を<sup>つた</sup>え<sup>る</sup>こと<sup>に</sup>に<sup>じかん</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>を<sup>な</sup>要<sup>よう</sup>したり<sup>する</sup>児童<sup>じどう</sup>生徒<sup>せいと</sup>等<sup>な</sup>に対し<sup>たい</sup>、活<sup>かつ</sup>動<sup>どう</sup>時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>を<sup>な</sup>十<sup>じゅう</sup>分<sup>ぶん</sup>に<sup>な</sup>確<sup>かく</sup>保<sup>ほ</sup>したり、障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>の<sup>とくせい</sup>特性<sup>な</sup>に<sup>お</sup>応<sup>おう</sup>じて<sup>な</sup>個<sup>こ</sup>別<sup>べつ</sup>に<sup>な</sup>対<sup>たい</sup>応<sup>おう</sup>したり<sup>する</sup>。
- (16) 順<sup>じゅん</sup>番<sup>ばん</sup>を<sup>ま</sup>待<sup>に</sup>つ<sup>が</sup>て<sup>な</sup>苦<sup>しょう</sup>手<sup>がい</sup>な<sup>たい</sup>障<sup>しゅ</sup>害<sup>うい</sup>者<sup>もの</sup>に対し<sup>りかい</sup>、周<sup>え</sup>圍<sup>うえ</sup>の<sup>な</sup>者<sup>な</sup>の<sup>な</sup>理<sup>てつづ</sup>解<sup>じゅん</sup>を<sup>な</sup>得<sup>な</sup>た<sup>な</sup>上<sup>な</sup>で、手<sup>て</sup>続<sup>つづ</sup>き<sup>な</sup>順<sup>じゅん</sup>を<sup>な</sup>入<sup>い</sup>れ<sup>か</sup>替<sup>か</sup>える。
- (17) 会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>、研<sup>けん</sup>修<sup>しゅう</sup>、講<sup>こう</sup>演<sup>えん</sup>など<sup>な</sup>では、ス<sup>しゅ</sup>ク<sup>わ</sup>リ<sup>ん</sup>ン<sup>な</sup>、手<sup>しゅ</sup>話<sup>わ</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>者<sup>な</sup>、要<sup>よう</sup>約<sup>やく</sup>筆<sup>ひ</sup>記<sup>き</sup>、板<sup>ばん</sup>書<sup>しょ</sup>が<sup>よ</sup>良<sup>み</sup>く<sup>な</sup>見<sup>み</sup>え<sup>る</sup>場<sup>ば</sup>所<sup>じょ</sup>等<sup>な</sup>障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>者<sup>な</sup>が<sup>き</sup>希<sup>き</sup>望<sup>ぼう</sup>する<sup>な</sup>場<sup>ば</sup>所<sup>じょ</sup>に<sup>な</sup>障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>者<sup>な</sup>自<sup>じ</sup>身<sup>しん</sup>の<sup>せき</sup>席<sup>し</sup>と<sup>し</sup>支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>者<sup>な</sup>の<sup>な</sup>活<sup>かつ</sup>動<sup>どう</sup>場<sup>ば</sup>所<sup>じょ</sup>を<sup>な</sup>確<sup>かく</sup>保<sup>ほ</sup>し、支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>者<sup>な</sup>の<sup>な</sup>周<sup>しゅ</sup>り<sup>わ</sup>を<sup>は</sup>な<sup>な</sup>を<sup>な</sup>明<sup>めい</sup>る<sup>な</sup>く<sup>な</sup>する<sup>な</sup>等<sup>な</sup>の<sup>な</sup>配<sup>はい</sup>慮<sup>りょ</sup>を行<sup>な</sup>う。また、手<sup>しゅ</sup>話<sup>わ</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>は<sup>は</sup>話<sup>わ</sup>し<sup>な</sup>手<sup>て</sup>の<sup>よこ</sup>横<sup>やく</sup>で<sup>な</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>す<sup>る</sup>よう<sup>に</sup>に<sup>しゅ</sup>す<sup>る</sup>と<sup>な</sup>も<sup>な</sup>に<sup>しゅ</sup>手<sup>わ</sup>話<sup>つう</sup>通<sup>やく</sup>訳<sup>やく</sup>が<sup>み</sup>見<sup>え</sup>る<sup>よう</sup>に<sup>な</sup>通<sup>つう</sup>訳<sup>やく</sup>台<sup>だい</sup>を<sup>じゅん</sup>準<sup>び</sup>備<sup>な</sup>する。
- (18) 車<sup>しゃ</sup>両<sup>りょう</sup>乗<sup>じょう</sup>降<sup>かう</sup>場<sup>じょう</sup>所<sup>じょ</sup>を<sup>し</sup>施<sup>し</sup>設<sup>せつ</sup>出<sup>で</sup>入<sup>い</sup>口<sup>こう</sup>に<sup>ち</sup>近<sup>ち</sup>い<sup>な</sup>場<sup>ば</sup>所<sup>じょ</sup>へ<sup>へん</sup>変<sup>へん</sup>更<sup>こう</sup>する。
- (19) 非<sup>ひ</sup>公<sup>こう</sup>表<sup>ひょう</sup>又<sup>また</sup>は<sup>な</sup>未<sup>み</sup>公<sup>こう</sup>表<sup>ひょう</sup>情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>を<sup>あつか</sup>扱<sup>かい</sup>う<sup>な</sup>会<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>等<sup>な</sup>において<sup>な</sup>、情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup>管<sup>かん</sup>理<sup>り</sup>に<sup>か</sup>係<sup>か</sup>る<sup>な</sup>担<sup>たん</sup>保<sup>ぽ</sup>が<sup>え</sup>得<sup>え</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>な</sup>こ<sup>と</sup>を<sup>な</sup>前<sup>ぜん</sup>提<sup>てい</sup>に、障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>のある<sup>いいん</sup>委<sup>り</sup>員<sup>かい</sup>の<sup>えんじょ</sup>理<sup>もの</sup>解<sup>お</sup>を<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>助<sup>じ</sup>する<sup>な</sup>者<sup>な</sup>及<sup>な</sup>び<sup>な</sup>コ<sup>こ</sup>ミ<sup>こ</sup>ミュ<sup>こ</sup>ニ<sup>こ</sup>ケ<sup>こ</sup>ー<sup>こ</sup>シ<sup>こ</sup>ン<sup>こ</sup>シ<sup>こ</sup>ン<sup>こ</sup>を<sup>し</sup>支<sup>し</sup>援<sup>えん</sup>する<sup>な</sup>者<sup>な</sup>(<sup>しゅ</sup>手<sup>わ</sup>話<sup>つう</sup>通<sup>やく</sup>訳<sup>やく</sup>者<sup>な</sup>等<sup>な</sup>)<sup>の</sup>同<sup>どう</sup>席<sup>せき</sup>を<sup>みと</sup>認<sup>め</sup>る。
- (20) 電<sup>でん</sup>話<sup>わ</sup>による<sup>な</sup>申<sup>もう</sup>し<sup>こ</sup>込<sup>こ</sup>み<sup>な</sup>や<sup>な</sup>本<sup>ほん</sup>人<sup>にん</sup>確<sup>かく</sup>認<sup>にん</sup>において<sup>な</sup>、電<sup>でん</sup>話<sup>わ</sup>が<sup>な</sup>できない<sup>な</sup>聴<sup>ちやう</sup>覚<sup>かく</sup>障<sup>しょう</sup>害<sup>がい</sup>者<sup>な</sup>の<sup>な</sup>た<sup>め</sup>に、<sup>ほうほう</sup>フ<sup>みと</sup>ァ<sup>な</sup>ク<sup>な</sup>ス<sup>な</sup>や<sup>な</sup>メ<sup>な</sup>ール<sup>な</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>な</sup>の<sup>な</sup>方<sup>な</sup>法<sup>な</sup>も<sup>な</sup>認<sup>め</sup>る。

また、合理的<sup>ごうりてき</sup>の<sup>はいりょ</sup>配<sup>ていき</sup>慮<sup>ぎ</sup>の<sup>む</sup>提<sup>い</sup>供<sup>はん</sup>義<sup>がい</sup>務<sup>どう</sup>違<sup>かん</sup>反<sup>が</sup>に<sup>な</sup>該<sup>れい</sup>当<sup>がい</sup>する<sup>な</sup>と<sup>かん</sup>考<sup>かん</sup>え<sup>な</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>な</sup>例<sup>れい</sup>及<sup>がい</sup>び<sup>かん</sup>該<sup>かん</sup>当<sup>が</sup>し<sup>な</sup>ない<sup>な</sup>と<sup>かん</sup>考<sup>かん</sup>え<sup>な</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>な</sup>例<sup>れい</sup>と<sup>な</sup>して<sup>な</sup>は、次<sup>つぎ</sup>の<sup>な</sup>よ<sup>な</sup>う<sup>な</sup>な<sup>な</sup>もの<sup>な</sup>が<sup>な</sup>あ<sup>る</sup>。な<sup>お</sup>、記<sup>き</sup>載<sup>さい</sup>さ<sup>れ</sup>て<sup>な</sup>い<sup>る</sup>内<sup>ない</sup>容<sup>よう</sup>は<sup>な</sup>あく<sup>ま</sup>で<sup>な</sup>も<sup>な</sup>例<sup>れい</sup>示<sup>じ</sup>で<sup>な</sup>あ<sup>り</sup>、<sup>ごうりてき</sup>合<sup>がい</sup>理<sup>り</sup>的<sup>てき</sup>の<sup>はいりょ</sup>配<sup>ていき</sup>慮<sup>ぎ</sup>の<sup>む</sup>提<sup>い</sup>供<sup>はん</sup>義<sup>がい</sup>務<sup>どう</sup>違<sup>かん</sup>反<sup>が</sup>に<sup>な</sup>該<sup>れい</sup>当<sup>がい</sup>する<sup>な</sup>か<sup>な</sup>否<sup>いな</sup>か<sup>な</sup>に<sup>な</sup>つ<sup>い</sup>て<sup>な</sup>は、<sup>こべつ</sup>個<sup>じ</sup>別<sup>あん</sup>の<sup>ぜん</sup>事<sup>じ</sup>案<sup>じゆつ</sup>ご<sup>と</sup>に、<sup>かんてん</sup>前<sup>ぜん</sup>述<sup>じゆつ</sup>の<sup>かんてん</sup>観<sup>かん</sup>点<sup>てん</sup>等<sup>な</sup>を<sup>な</sup>踏<sup>ふ</sup>ま<sup>え</sup>て<sup>な</sup>判<sup>はん</sup>断<sup>だん</sup>す<sup>る</sup>こ<sup>と</sup>が<sup>な</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>で<sup>な</sup>あ<sup>る</sup>こ<sup>と</sup>に<sup>な</sup>留<sup>りゅう</sup>意<sup>い</sup>す<sup>る</sup>。

#### 4 合理的<sup>ごうりてき</sup>の<sup>はいりょ</sup>配<sup>ていき</sup>慮<sup>ぎ</sup>の<sup>む</sup>提<sup>い</sup>供<sup>はん</sup>義<sup>がい</sup>務<sup>どう</sup>違<sup>かん</sup>反<sup>が</sup>に<sup>な</sup>該<sup>れい</sup>当<sup>がい</sup>する<sup>な</sup>と<sup>かん</sup>考<sup>かん</sup>え<sup>な</sup>ら<sup>れ</sup>る<sup>な</sup>例<sup>れい</sup>

- (1) 入<sup>にゅう</sup>学<sup>がく</sup>試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>や<sup>けん</sup>検<sup>けん</sup>定<sup>てい</sup>試<sup>し</sup>験<sup>けん</sup>等<sup>な</sup>において<sup>な</sup>、筆<sup>ひ</sup>記<sup>き</sup>が<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>な<sup>な</sup>た<sup>め</sup>デ<sup>で</sup>ジ<sup>じ</sup>タル<sup>た</sup>機<sup>き</sup>器<sup>き</sup>の<sup>しりょう</sup>使<sup>し</sup>用<sup>も</sup>を<sup>な</sup>求<sup>もと</sup>め<sup>る</sup>る<sup>な</sup>申<sup>もう</sup>出<sup>し</sup>が<sup>な</sup>あ<sup>つ</sup>た<sup>な</sup>場<sup>ば</sup>合<sup>あ</sup>い<sup>に</sup>、<sup>き</sup>デ<sup>で</sup>ジ<sup>じ</sup>タル<sup>た</sup>機<sup>き</sup>器<sup>き</sup>の<sup>しりょう</sup>使<sup>し</sup>用<sup>も</sup>を<sup>な</sup>認<sup>め</sup>た<sup>な</sup>前<sup>ぜん</sup>例<sup>れい</sup>が<sup>な</sup>い<sup>な</sup>い<sup>な</sup>と<sup>な</sup>い<sup>う</sup>理<sup>り</sup>由<sup>ゆう</sup>で、<sup>ひつ</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>な<sup>な</sup>調<sup>てい</sup>整<sup>じゆ</sup>を行<sup>な</sup>う<sup>な</sup>こ<sup>と</sup>なく、<sup>いち</sup>一<sup>いち</sup>律<sup>りつ</sup>に<sup>な</sup>対<sup>たい</sup>応<sup>おう</sup>を<sup>な</sup>断<sup>ことわ</sup>る。

- (2) 施設内の移動に際して支援を求める申出があった場合に、「何かあったら困る」という抽象的な理由で具体的な支援の可能性を検討せず、支援を断ること。
- (3) 電話利用が困難な障害者から電話以外の手段により各種手続が行えるよう対応を求められた場合に、マニュアル上、当該手続は利用者本人による電話のみで手続可能とすることとされていることを理由として、メールや電話リレーサービスを介した電話等の代替措置を検討せずに対応を断ること。
- (4) 介助を必要とする障害者から、講座の受講に当たり介助者の同席を求める申出があった場合に、当該講座が受講者本人のみの参加をルールとしていることを理由として、受講者である障害者本人の個別事情や講座の実施状況等を確認することなく、一律に介助者の同席を断ること。
- (5) 自由席での開催を予定しているセミナーにおいて、視覚障害者からスクリーンや板書等がよく見える席でのセミナー受講を希望する申出があった場合に、事前の座席確保などの対応を検討せずに「特別扱いはできない」という理由で一律に対応を断ること。

## 5 合理的配慮の提供義務に反しないと考えられる例

- (1) 事務の一環として行っていない業務の提供を求められた場合に、その提供を断る。(必要とされる範囲で本来の業務に付随するものに限られることの観点)
- (2) 抽選申込みとなっている講座への参加について、抽選申込みの手続きを行うことが困難であることを理由に、講座への参加を事前に確保しておくよう求められた場合に、当該対応を断る。(障害者でない者との比較において同等の機会の提供を受けるためのものであることの観点)
- (3) オンライン講座の配信のみを行っている社会教育施設等が、オンラインでの集団講義では内容の理解が難しいことを理由に対面での個別指導を求められた場合に、当該対応はその事業の目的・内容とは異なるものであり、対面での個別指導を可能とする人的体制・設備も有していないため、当該対応を断る。(事務・事業の目的・内容・機能の本質的な変更には及ばないことの観点)
- (4) 図書館等において、混雑時に視覚障害者から職員等に対し、館内を付き添って利用の補助を求められた場合に、混雑のため付添いはできないが、職員が聞き取った書籍等を準備することができる旨を提案する。(過重な負担(人的・体制上の制約)の観点)